

【無料配布】短編ミステリ 文学フリマ札幌11書き下ろし

凍れるユディト

作…庵字^{あんじ}

「つい、かっとなって」とは、人を殺した人間がよく口にする言葉だというが、まさか笹山^{ささやま}は、自分がそういう心理状態になり、かつ——まさに人を殺してしまふことになるとは想像もしていなかった。目の前で、腹部から真っ赤な血を流して倒れている城林^{しろばやし}の死体を呆然と見下ろしていた笹山は——

「誰か、いるんですか？」

出入り口からかけられた声に、びくりと身を震わせると、通用口へと走った。その足音を耳にしたのだらう。「ちよつと——」なおもかけられた警備員の声を背に、笹山は通用口を飛び出した。中庭へ出た直後、「ひいっ！」という悲鳴が聞こえた。警備員が死体を発見したのだ。これでもう追ってくることはあるまい。

足を止めた笹山は、汗ばむ頬を拭おうとして、ぎよつとした。その右手には凶器が——自分が刺した城林の血がべつとりと付着した凶器が——握られている。思わず凶器を持ったまま逃走してしまったのだ。すぐに警察が駆けつけてくるであろう現場には戻れない。笹山は改めて凶器を見る。ずしりと想像より重く感じるのは、これで人を殺したという心理ゆえか。手袋をしたままなので指紋の問題はないが、これは処分するしかないだらう。なに、この凶器を処分するのは簡単なことだ。笹山は、目の前にある池に向かって凶器を放り投げた。どぼん、という水音を聞くと同時に、笹山はその場から走り去った。

手を貸してくれ、と警部に頼まれた探偵は、事件現場である公営ホールへ到着すると、さっそく警部から事件概要の説明を受けた。

「殺されたのは、黒原晋太郎^{くろはらしんたろう}さんのマネージャー、城林さんだ。明日から始まる個展の準備をしていたらしい。死体の発見と110番通報したのは警備員で、定時巡回中に展示室から物音がしたので覗いてみたら、何者かが通用口に走り去ったところで、追いかけて中に入って死体を発見したそうだ」

探偵は廊下の壁に貼られたポスターを見上げた。

〈黒原晋太郎個展〜光の伝説〜〉開催日は明日からとなっている。

「通報時刻は、午後六時十分だ」

警部の言葉に、探偵は腕時計を見る。現在時刻は八時半だった。

「警部、通報から二時間程度しか経っていないのに僕が呼ばれたということは「そうだ。この事件、苦戦しそうな予感がする。実際、被害者が人から恨まれていたという証言は聞けていないし、関係者たちのアリバイもはっきりしない」

「怨恨とアリバイ方面からは線が薄いということですか。凶器は？」

「現場にあったものが使われたようだが、もうなくなっている」

「なくなっている？ 犯人が持ち去ったということですか？」

「たぶん、そうだろうが……実際になくなったと見られてる」

「どういう意味です？」

「来れば分かる」

警部は探偵を伴い、殺害現場である展示室に入った。

「うわあ、これは壮観ですね」

探偵が感嘆の声を漏らす。広いホールを使った展示場には、大小何体もの彫像が並んでいた。同時に探偵は、ぶるる、と体を震わせて、

「さすがに寒いですね」

「仕方ないだらう」

警部も体を揺すった。ホールが寒い理由、それは、黒原晋太郎が氷の彫刻家で、展示された彫像はすべて氷で出来ているためだった。場内にはレーザー光線なども置かれ、個展タイトル「光の伝説」に相応しい演出を見せるのだという。

人物や動物を象った氷の彫像の間を縫い、二人は死体があった場所に到着した。床には人の形に白いテープが貼られている。

「被害者の死因は、短剣で腹部を刺されたことによる失血死だ」

床に広がる赤い染みが、警部の言葉を裏付けていた。それを聞いた探偵は、「凶器は持ち去られたそうですが、短剣だということは分かっているんですね？」

「ああ、どんな形かも分かっているよ」

「……どういことですか？」

「凶器は……そこにあったものが使われたんだ」

警部が指さした先を見て、探偵は、ぎょっとした。小さな机を前に美しい女性が立っている。探偵が驚いたのは、机の上に置かれたものを目にしたためだった。「これって……生首ですか？」

「ああ、聖書のもとに制作された像らしい。デュエットとか言ったかな……」

「もしかして『ユデイト』じゃないですか？」

「ああ、そんな名前だった」

「そういうことですか。ユデイトの像なら、ホロフェルネスの首と、それを斬り落とした短剣もセットのはずですからね。なのに、首しかないということは……」

「ああ、犯人は、そこにあった氷の短剣で被害者を刺し、逃亡したんだ」

「ちなみにですね、ユデイトは、旧約聖書外典『ユデイト記』の主人公です。アツシリア王ネブカドネザルが派遣したホロフェルネスに、ベトリアという町が包围され、町の指導者は降伏しようとしたのですが、そこにユデイトが――」

「蘊蓄はあとで聞こう」警部は探偵の話を制すと、「犯人は、あそこの通用口から逃走したと見られている。来てくれ」

探偵を連れて、警部は通用口をくぐる。外は施設の中庭だった。生け垣に囲われた遊歩道を数十メートルも歩くと、大きな池のほとりに着いた。

「凶器を『処分』するとしたら、ここが絶好だろうな」

「『凶器がなくなった』というのは、そういうことですか……」

探偵はその場にしゃがみ込み、水面を見下ろした。人工池で常に水を循環しているため、水の透明度は高い。水深は十数センチ程度で、タイルを敷き詰めた池の底を、外灯の明かりでも水を透かして見ることが出来る。水面に指を浸すと、探偵の指に生ぬるい感覚が伝わった。

「連日の猛暑に晒されてお湯みたいになってるだろう。ここへ氷の短剣を投げ込んだら、一時間とかからないで消えてなくなるだろうな」

「短剣くらいのおおきさのものが、一時間で完全に溶けてなくなるかは分かりませんが、もし溶けきらずに残っていたとしても、氷は水に浮きますからね」

二人が見る水面には、木の葉一枚浮かんでいなかった。そこに、

「警部！」走ってきた制服警官が声をかけ、「凶器が発見されました！」

どこからだ？ と振り返った警部に訊かれると、制服警官は、

「イベントスタッフのひとりが泊まっている部屋の冷凍庫からです」

「間違いないのか？ 凶器の短剣に？」

「はい。資料にあった写真とまったく同じデザインでした。ですが……」

「どうした？ なにか問題があるのか？」

「はい。短剣は二つに折れていて、細かい装飾なども破損した状態でして……」

「……そのスタッフのアルバイトは？」

「完璧です。犯行時刻前後一時間にわたって、他のスタッフ数名と一緒にでした」

「……どういふことだ？」

「……警部」黙考していた探偵が、「いますぐ、池をさらってください」

「池をさらう？ どうして？」

「凶器が見つかるかもしれません」

「はあ？」

凶器は池の底から発見された。ガラス製の短剣で、刀身に付着した血液は被害者のものと一致した。この発見を受け、問い詰められたスタッフが証言を始めた。黒原の作品を展示室に搬入する際、スタッフのひとりがユデイトの短剣を落として破損させてしまった。慌てたスタッフたちは、近くの骨董品店に似たデザインのガラス製の短剣が売られていることを突き止め、それを購入して破損させた短剣の代用とした。当然、この事実はスタッフ間だけの秘密とされた。

「つまり、犯人は、展示されている短剣がガラス製だと知らなかった人物です。手にしたのに短剣がガラス製だと分からなかったということは、普段から手袋をした職業に就いているのだと思われます。凶器が氷だと疑っていなかったからこそ、犯人は短剣を池に投げ捨てたわけですからね」

捜査の結果、タクシー運転手の笹山が逮捕された。被害者とは同郷で、偶然被害者を会場まで乗せたことで数十年ぶりに再会したのだという。

「高校時代、散々俺をいじめていたくせに、タクシーを降りると、俺の仕事をちよつと見せてやるよ、とか恩着せがましく展示室に誘ったうえ、仕事の自慢話ばかりしやがるものだから……つい、かっとなって……」

取り調べに対し、笹山はそんなことを語っていた。

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」E―15―16に、ぜひまたお越しください！